様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８２０２８

研究課題名（和文）中高生年代の能動的居場所に関する学際的研究―ナナメの関係の観点から―

研究課題名（英文）Interdisciplinary Study about "Ibasho (the person who eases your mind)" of Youth : Effect of Diagonal Dyadic ('Naname') Relationships

研究代表者
枝廣　和憲（EDAHIRO, Kazunori）

岡山大学・学内共同利用施設等・講師

研究者番号：８０７３７１７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：中高生年代の能動的居場所に関して、ナナメの関係の観点から、調査・研究を行った。本研究課題では、第一に、ナナメの関係と同年輩の友人関係との質的差異について、TEMを用いて検討した。結果、ナナメの関係を持つことが自我発達にポジティブな影響を及ぼしていると推察された。第二に、学校における居場所形成に関するアメリカの実践の我が国への導入について、海外の知見をもとに検討した。結果、日本における、PBISの第1層支援および第2層支援の導入にかかわる展望を示した。

研究成果の概要（英文）： The present studies were intended as investigation whether Diagonal Dyadic ('Naname') Relationships in 'Ibasho (the person who eases your mind)' were useful for adolescents' Ego Development.Diagonal Dyadic ('Naname') Relationships in 'Ibasho (the person who eases your mind)' were useful for adolescents' mental development.
This study, for the development of PBIS(Positive Behavioral Interventions and Supports) (Tire 1 & Tire 2) in Japan, was an overview of the study of the United States of PBIS and PBS. In the United States we have introduced the PBIS (Tire 1 & Tire 2). Efficacy of PBIS (Tire 1 & Tire 2) has been demonstrated in special needs education. We created a trial basis introduction model for PBIS (Tire 1 & Tire 2) in Japan.

研究分野：子ども・環境学、青年心理学、教育心理学、臨床心理学

キーワード：居場所　ナナメの関係　応用行動分析　PBS　PBIS　SWPBIS

１．研究開始当初の背景

（1）　居場所研究に「関係性」の要素を取り入れる重要性

文部省が提唱した「こころの居場所」の必要性や文部科学省の「地域教育再生プラン（子どもの居場所づくり新プラン）」の実施など、近年青少年の居場所の必要性が重視されている。

居場所について、教育学、心理学、建築学など多岐の分野で理論、実践ともに研究され、その有用性が指摘されてきた（例えば北山、2003；住田、2003；鈴木・中野、2000 など）。研究を概観すると、安心感や本来感など、心理学的居場所感に言及するものが多い（石本、2006；杉本、2006；則定、2007）。しかし、居場所における「関係性」の重要性を指摘するものもある（山岡、2002；住田、2004；枝廣、2011；枝廣 2012）。都筑（1998）は実践現場の報告等をもとに、居場所は物理的な場所と安心した心理状態の両方を含んだものであり、そこでは他者とのつながりが存在しているとしている。田中（2002）は居場所を関係性の中で自分の位置と将来の方向性をその時々で確認できる場としている。しかし、これら研究によって、臨床的な知見は蓄積されているものの、実証的な研究は十分とはいえない。居場所研究において、「関係性」の観点からそのメカニズムを解明することは十分に意義のあることと考えられる。

（2）　青年期における能動的居場所形成の過程を取り上げる重要性

居場所づくり（能動的居場所形成）の対象は主として、小学生～高校生であるのに対し、先行研究での実証研究は主として大学生を対象としている。さらに、中高生年代を対象とした居場所、特に、中高生年代と大学生年代とが相互に交流する場としての居場所は、研究されていない。また、学校の居場所など、既存の居場所を扱ったものが多く、「居場所づくり」という能動的な活動に対する評価はなされていない。上記のように、居場所の重要性が指摘される中、能動的居場所形成の過程を明らかにすることは、我が国の政策の一視座となると考えられる。

２．研究の目的

（1）　ナナメの関係と同年輩の友人関係との質的差異を明らかにする。

先行研究における交友関係に関する研究は、友人を同年輩に限定している。しかし、先の研究結果（枝廣、2011）から、現代の高校生の交友関係には、同年輩に限らず、ナナメの関係を有していることが明らかにされた。両者の交友関係の特徴が同質であるとは考えにくい。この関係の質的差異がナナメの関係による心的成長を促しているものと考えられる。そこで、本研究課題では、両者の質的差異を明らかにすることを目的とする。

（2）　学校における居場所形成に関するアメリカの実践の我が国への導入を検討する。

文部省の学校不適応対策調査研究協力者会議（1992）は、題目を「登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の『心の居場所』づくりをめざして－」とする報告書を示した。学校現場において教師が行う指導によっては不登校問題だけでなくその他の問題に対応することや予防を行っていくことも可能である。また、現在の教育現場において、望ましい学級集団づくりを行いつつ、その中で安心できる居場所を確保して友人との関わり合いを促進することは重要な課題の一つであると考えられる。本研究課題では、アメリカで行われている学校における居場所形成の我が国への導入を検討することを目的とする。

（3）　ナナメの関係の教育的実践に関する効果の実証的検証を行う。

文部科学省（2007）において、ナナメの関係が推奨されているが、その教育的実践は少ない。そのなかで、立命館大学と立命館高等学校において、ピア・サポートを中心とするナナメの関係の育成が行われている。応募者は、当該機関と充分な協力体制をとっている。本研究課題では、当該機関の行うナナメの関係の教育的実践の効果について、統計的手法を用いて実証的検証することを目的とする。

３．研究の方法

（1）　ナナメの関係と同年輩の友人関係との質的差異を解明

高校生および大学生に対し、半構造化面接および TEM（複線径路・等至性モデル）を用いて、同年輩の友人関係とナナメの関係との質的差異を調査する。

（2）　学校におけるアメリカの居場所形成の実践の我が国への導入の検討

アメリカへの視察に得られた知見をもとに我が国への導入を試みる。

（3）　ナナメの関係の教育実践に関する効果を解明

①　研究方法・内容

ナナメの関係の教育的実践を実践校で実施し、その実践の前後において質問紙調査を実施する。また、統制校については、質問紙調査（post）実施後にフォローアップを行う。

②　用いる質問紙

尺度は、主としてキャリアにかかわるもの（例えば、進路選択に対する自己効力尺度（浦上、1995）など）を用いる。

③　分析計画

教育実践効果の比較のため、群（実践校・統制校）×時期（pre・post）

の分散分析を行う。さらに、作用機序の検討のため、群ごとに変化量の相関分析、偏相関分析を行う。

４．研究成果

(1) ナナメの関係と同年輩の友人関係との質的差異について

中高生年代を対象とする児童館とNPOの共同で運営された居場所＝「ヨルのジドウカン」で、筆者は約6年間活動してきた。そのなかで、出会った、青少年時代を居場所＝「ヨルのジドウカン」で5年間過ごした、現在社会人の女性Yさんに今回インタビューを実施した。半構造化面接を行い、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model: 以下、TEM）の手法を用いながら、面接協力者の体験を一つのTEM図にまとめた。TEMとは、データの分析及び記述に関する方法であり、時間を捨象することなく、多様な経験の径路を提示するという理念を基盤とする、質的研究法の一つである（サトウ、2009）。

Yさんへのインタビューから得た情報をもとに、必須通過点と分岐点の特定を行い、ナナメの関係を青年期中期に経験し、現在に至るまでのプロセスのモデル化を行った。

Yさんは、まず青年期中期に生徒会に入るなど、「優等生」である自分に少なからず違和感を覚えていた。その後、居場所におけるナナメの関係とのかかわりの中で、「紆余曲折してる人」と出会い、「優等生」としての自分との違和感を実感していき、「ふざけてもいい」「それでもいいんや」と思うようになった。他の高校生と同じく、留学せずにそのまま卒業することもできたが、敢えて、「留年してもいい」という覚悟の上、留学を決意する。その後、大学への進路選択に関して、ナナメの関係の人々の職業に多かった小学校教員養成課程へと進学する。大学4年生時に一旦教員採用試験を受けずに、企業の契約職員となる。「紆余曲折して」現在の小学校の教員となった。現在の自分について、「高校生の時に憧れてた人たちに近づけた気がする。」と語った。

Yさんは、青年期中期に自分が「優等生」であるか否かの自我の揺らぎを経験している。そこに、ナナメの関係に位置する大学生スタッフの「ふざけてもいい」「紆余曲折して」もいいといった、「「優等生」でなければならない」という縛りから解放され、自分の自我の揺らぎを安定させていったと推察される。その後の進路選択や職業選択に対しても、ナナメの関係といった具体的な未来に対する時間的展望をモデルとして取り入れ、確立していったものと解釈できる。以上から、ナナメの関係を持つことが自我発達にポジティブな影響を及ぼしていると推察された。

(2) 学校における居場所形成に関するアメリカの実践の我が国への導入について

近年、生徒指導・教育相談において、「包括的な学校生徒指導・教育相談アプローチ（Complihensive School Counseling and Guidance Approach: 以下、CSCGA）」が注目されている。その一環として、「学校全体における積極的行動介入および支援（School-Wide Positive Behavioral Interventions and Supports、: 以下、SWPBIS）」があげられる。しかしながら、School-Wideすなわち、学校全体としてPBISに着目した臨床実践報告は少ない。そこで本稿では、School-Wide すなわち、学校全体としてPBIS(SWPBIS)について、先駆的に実践しているアメリカイリノイ州の公立小中学校(District15)の取り組みに着目し、SWPBISの動向と実際について報告した。そして、日本における生徒指導および教育相談における、SWPBISの展開に向けた検討材料を示唆した。

日本におけるPBISの第1層支援および第2層支援の開発のために、アメリカのPBSおよびPBISについての研究をレビューしたものである。アメリカにおけるPBISの第1層支援を紹介した。特別支援教育の分野において、PBISの第1層支援および第2層の効果が検証されている。これらを踏まえて、日本における、PBISの第1層支援および第2層支援の導入にかかわる展望を示した。

(3) ナナメの関係の教育実践に関する効果について

実践の事前と事後を比較するために、事前の共同体感覚尺度の因子得点（信頼感・所属感因子得点、自己受容因子得点、貢献感因子得点）と事後の共同体感覚尺度の因子得点に関して、対応のあるｔ検定を行った。その結果、貢献感因子得点（$t(19)=-3.40$、$p<.01$）に有意な差がみられた。その他の因子得点には有意な差がみられなかった。

次に、高校生のための進路選択自己効力尺度の因子得点と事後の高校生のための進路選択自己効力尺度の因子得点に関して、対応のあるｔ検定を行った。その結果、高校生のための進路選択自己効力因子得点（$t(19)=-3.14$、$p<.01$）に有意な差がみられた。

続いて、事前の時間的展望体験尺度の因子得点（目標指向性因子、希望因子、現在の充実感因子、過去受容因子）に関して、対応のあるｔ検定を行った。その結果、すべての因子得点には有意な差がみられなかった。

以上の結果から、共同体感覚の特に貢献感が有意に上昇していたことから、ピア・サポートの「サポート」力に関する自分自身への自信がうかがえる。ただし、他の項目（所属感・信頼感、自己受容）については、実際のピア・サポート活動を通して上昇するものと考えられる。進路選択自己効力が有意に上昇したことから、院生とのかかわりのなかで、ナナメの関係を得て、進路に対する自己効力

が上がったものと推察できる。時間的展望に関しては、短期間での変化が認められなかったものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 枝廣和憲、松山康成、学校全体における積極的行動介入および支援の動向と実際 ―イリノイ州 District15 公立中学校における取り組みを中心に―、岡山大学教師教育開発センター紀要、査読無 5 、 2015 、 pp.35-43 、 http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/53233
② 枝廣和憲、松山康成、学校全体における積極的行動介入および支援の動向と実際 ―イリノイ州 District15 公立小学校における取り組みを中心に―、岡山大学学生支援センター年報、査読無、第 8 号、2015、pp.27-37
③ Kazunori EDAHIRO、Yusuke MAEDA、A Qualitative Study on Effect of Diagonal Dyadic ('Naname') Relationships during Adolescence in 'Ibasho (the person who eases your mind)' : using with ethnography method and TEA (Trajectory Equifinality Approach)、Proceedings of the 7th Annual Conference of ICER 2015、 International Conference on Educational Research、査読有、2015、pp.915-919
④ 枝廣和憲、松山康成、PBIS（Positive Behavioral Interventions and Supports） の第１層支援（Tire1）に関する研究の概観と展望、岡山大学教師教育開発センター紀要、査読無、6、2016、pp.59-66 、 http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/54021
⑤ 枝廣和憲、松山康成、PBIS（Positive Behavioral Interventions and Supports）の第 2 層支援（Tire2）に関する研究の概観と展望、学習開発学研究、査読無、第 9 号、2016、pp.51-58、http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039425

〔学会発表〕（計５件）

① 枝廣和憲、中高生年代を居場所で過ごした青年、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 10 月、神戸国際会議場（神戸市）
② 枝廣和憲・内田一樹・関塚倫子・畑中樹奈・河美善・藤田瑞紀・梶井亮・木戸口峻・西川大輔・原田有規・山崎瑞貴・春日井敏之・増田梨花、ピア・サポートプログラムを活かした高大連携の取り組みが高校生の心的成長に及ぼす影響－ナナメの関係に着目して－、日本ピア・サポート学会第 14 回総会・大会、2015 年 10 月、国立女性会館（さいたま市）
③ 西川大輔・梶井亮・木戸口峻・原田有規・山崎瑞貴・枝廣和憲・春日井敏之・増田梨花、大学院生を対象とした合宿型ピア・サポート・トレーナー養成のための研修講座の効果検証―高大連携の取り組みにおけるトレーニング効果の考察を通して―、日本ピア・サポート学会第 14 回総会・大会、2015 年 10 月、国立女性会館（さいたま市）
④ 河美善・内田一樹・関塚倫子・畑中樹奈・藤田瑞紀・西川大輔・梶井亮・木戸口峻・原田有規・山崎瑞貴・枝廣和憲・春日井敏之・増田梨花、ピア・サポートプログラムを活かした高大連携の取り組み－院生の変容プロセスに焦点をあてて－、日本ピア・サポート学会第 14 回総会・大会、2015 年 10 月、国立女性会館（さいたま市）
⑤ 松山康成・枝廣和憲・池島徳大、学年全体で取り組むＰＢＩＳ実践－規範意識に着目して－、日本ピア・サポート学会第 14 回総会・大会、2015 年 10 月、国立女性会館（さいたま市）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
報道関連情報
(1) 山陽新聞、2016 年 3 月 7 日朝刊 http://www.sanyonews.jp/article/310632
ホームページ等
https://sites.google.com/site/branchbrunch/project/ibasho

６．研究組織
(1)研究代表者
枝廣　和憲（EDAHIRO、 Kazunori）
岡山大学・全学教育・学生支援機構・講師
　研究者番号：80737172

(2)研究協力者
南　博文(MINAMI、 Hirofumi)
九州大学・教授
鈴木　毅(SUZUKI、 Tsuyoshi)
近畿大学・教授
山下　智也(YMASHITA、 Tomoya)
西日本短期大学・准教授
日高　茂暢（HIDAKA、 Motonobu)
作新学院大学・講師
松山　康成（MATSUYAMA、 Yasunari)
広島大学大学院・博士後期課程